

火山と共に生

連綿と続く人びとの営み

北海道南西部に位置する有珠山。この世界有数の活火山の麓には、7,000年前の縄文時代早期から現在に至るまでの各時代の貝塚や集落などの遺跡が多数残されている。遺跡とは人類の活動の痕跡であるから、それはすなわち、この地を舞台とする人びとの営みが連綿と続いてきたことを示している。

なかでも17世紀中頃の有珠地区（「ウス」）には大きな集落があり、多くのアイヌが暮らしていた。近年の発掘調査によって、住居（チセ）や貝塚、墓、畑の跡などが発見され、当時の暮らしぶりが、より具体的に明らかになってきた。と同時に、火山の麓で暮らす人びとの葛藤もみえてきた。

火山が生んだ自然景観と豊かな動物相

古くから日本三景のひとつである松島にも例えられてきた^{※1}ウスの美しい自然景観は、有珠山の火山活動によってできたものだ。

もとは円錐形の成層火山であったといわれる有珠山が、2万年前^{※2}に自身の激しい火山活動によって崩壊し、山頂から噴火湾にまで岩屑なだれ^{※3}となって流れ下ったことで、小丘陵（「流れ山」）が点在する起伏に富んだ地形と、「天然の良港」といわれる複雑な海岸線が形成された。

こうした変化に富んだ地形が豊かな動物相を育み、自然の恩恵を受けて暮らす人びとの生活を支えてきたのである。ウスは、日本有数の貝塚地帯である噴火湾沿岸のなかでも、とりわけその数が多いことで知られている。貝塚からは、アサリやホタテ、ニシンやオットセイなどが出土しており、人びとはそれを食べたり、交易品としたりしていた。これも有珠山の火山活動の賜物といえるだろう。



有珠地区地形図



二度の大規模火山災害

このように、人びとは多くの恵みを有珠山から与えられて暮らしてきたわけだが、火山は時として大きな災害をもたらす存在でもあった。

17世紀中頃のアイヌ集落であるポシマ遺跡やカムイタブコブ下遺跡では、集落を構成するさまざまな遺構がセットで発見されている。その結果、チセに住み、海で獲物を獲り、畑を耕し、人が亡くなれば太刀や鉄鍋、漆器などの副葬品とともに葬る、という当時のアイヌの姿がいきいきと浮かび上がってきた。さらに、そうした人びとの暮らしや集落の様相を、火山の噴火が一変させたことも明らかになったのである。

ウスの遺跡を掘ると、二つの大規模火山災害の痕跡を目の当たりにすることになる。いずれも17世紀中頃に発生した、火山爆発指数5とされる数百年に一度の爆発的大噴火によるものだった。

その一つ目は、1640年の駒ヶ岳噴火で、崩壊した山体が噴火湾に流れ込んだことによって発生した巨大津

※1 菅江真澄1791『蝦夷通天布利（えぞのでぶり）』

※2 藤根 久他2016「有珠山善光寺岩屑なだれの発生年代の再検討」『第四紀研究』55-6

※3 岩屑なだれ

火山噴火や地震などによって山体が大規模に崩壊し、空気と混合して斜面を高速で流下する現象。海や湖になだれ込んだ場合は津波が発生することもある。

きる

永谷 幸人 (ながや ゆきひと)

伊達市噴火湾文化研究所学術研究支援員

1983年愛知県生まれ。東海大学大学院博士課程在学中の2012年から伊達市噴火湾文化研究所に勤務。以来、史跡北黄金貝塚や有珠地区のアイヌ文化の遺跡などの調査に携わる。研究のフィールドは広く、縄文から現代、沖縄から北海道まで。

波が沿岸を襲ったものである。古文書によれば、100余隻の昆布取船を破壊し、700余名が溺死するほどの巨大な津波であったという^{※4}。ウスには、その痕跡が厚さ10cm程の津波堆積物（津波によって運ばれた海底の砂など）として残されている。

もう一つが、1663年の有珠山噴火だ。2万年前の山体崩壊を引き起こした大噴火から長い休眠期間にあった有珠山が、1663年8月（新暦）に火山活動を再開させ、8月17日には噴煙柱が2万5千mにも達する大噴火が起こった。放出された軽石は山麓に2mも降り積もり、海上に降った軽石によって一帯の海はさながら陸地のごとくであったという。一連の噴火活動は8月末頃まで続き、辺り一面が分厚い火山灰に覆われてしまった。この噴火で家屋が埋没・焼失し、住民5名が犠牲になったとされる^{※5}。

火山と共に生きる

17世紀中頃は、小氷期と呼ばれる世界的な寒冷期のなかでも最も気温が低く、世界各地で飢饉が頻発し、

日本列島全域で世情が不安定になった時期でもある^{※6}。北海道ではさらに、1667年に樽前山が火山爆発指数5の大噴火を起こし、アイヌ社会に大きな混乱を招いた。

こうした不安定な世情の中、わずか23年の間に、数百年に一度という規模の大噴火に二度も遭遇した人びとは、どのように火山と向き合ったのだろうか。

カムイタプコプ下遺跡では、1640年の津波を被った土地を耕して畑を営み、ポンマ遺跡ではチセを再建し、畑や貝塚のある暮らしを取り戻している。こうしてすぐに再興されたアイヌの集落であるが、1663年の有珠山噴火によって埋没してしまう。ポンマ遺跡では、有珠山の噴火以前は小さな入江がチセの目の前にまで迫っていたが、厚く積もった火山灰によって辺り一面が平坦な土地になった。一変した景観を目の当たりにした人びとの絶望感はいかばかりであったろうか。

それでもなお、彼らがウスの地を放棄することはなかった。埋まってしまった生活空間を墓域として利用し続けたのである。さらに、噴火の後につくられた貝塚の位置から、彼らが生活空間を少し移動させただけで、この地でたくましく生き続けたこともわかっている。

ウスの人びとは、火山の被害に繰り返しあいながらも、生活空間を再建したり、土地の利用法を変化させたりしながら、火山と共に生きることを選択したのだ。

「後出しジャンケン」的に罹災者を揶揄することは簡単かもしれない。しかし、彼らの姿が、「3.11」以降を生きる私たちに問いかけることの大きさにこそ、目を向けるべきではないだろうか^{※7}。

人はいつから、何故に土地に縛られるのか。その答えを経済的理由にだけ求めるのはナンセンスだ。たしかに、ウスは資源の宝庫であり、寛文年間（1661～73年）には有珠会所^{※8}が開設された和人との交易の拠点でもあった。ただ、それだけではない歴史の蓄積や、ウスの風景への愛着こそが、ここに暮らし続けるという決断の重要な原動力となったように思えてならない。

火山と共に生きる。それは彼らのアイデンティティに関わる問題だったのでないだろうか。

※6 添田雄二他2016「小氷期最寒冷期と巨大噴火・津波がアイヌ民族に与えた影響」『北海道博物館研究紀要』1

※7 カムイタプコプ下遺跡の調査成果報告を兼ねた防災について考える公開シンポジウムを2017年3月11日13～15時に北海道伊達市「だて歴史の杜カルチャーセンター」にて開催します。入場無料・申込不要。

※8 会所

近世、商業上の取引をするために人々が集まった所。幕府の統制下に置かれた。

※4 西村裕一・宮地直道1998「北海道駒ヶ岳噴火津波（1640）の波高分布について」『火山』43-4

※5 中村有吾他2005「噴出物から推定した有珠山1663年噴火の推移」『地学雑誌』114